専修大学出版局『大学生、限界集落へ行く』刊行

学生が集落活性化事業の一環で フィールドワークをもとに執筆

専修大学出版局は6月、同大学の学生たちが限界集落でのフィールドワークをもとに執筆した『大学生、限界集落へ行く―「情報システム」による南魚沼市辻又活性化プロジェクト―』を刊行する。執筆を担当したのは、同大学経営学部の森本祥一准教授ゼミの学生。同ゼミは2014年に新潟県が公募した「平成26年度　大学生の力を活かした集落活性化事業」に採択され、専修大学の出版企画委員会が学生が企画・執筆する書籍の刊行助成を実施していることを知った森本教授の提案により、集落活性化事業の一環として今回の出版企画が決まった。（入岡佑樹）

フィールドワークの対象となった地区は、新潟県南魚沼市辻又地区。人口約40人で、そのうち85%以上が高齢者といういわゆる「限界集落」だ。現地調査の開始は14年8月。ゼミ生の中から選抜した「チームコシヒカリ」の続行。現地取材のほか、物産展で辻又産コシヒカリを使ったおにぎりを販売したり、レシピ開発を行うなど活性化策を実行した。

約2年間の活動の集大成としてこのたび刊行される『大学生、限界集落へ行く』は、定性的な調査方法であるエスノグラフィにあたる。辻又地区の地理や歴史、現地での調査や交流、住民へのインタビューなどを記録し、調査を通じて学生たちが考え、実際に行った活性化策の結果や今後の課題、「チームコシヒカリ」メンバーの座談会なども収録している。「自分で見て、聞いて、感じたことをそのまま文章にしたのでより〝リアル〟なのかなと思う」（同4年・福井瑞来さん）。

専修大学出版局では、これまでも学生が企画に関わった書籍を数点出版しているが、「一般の人に広くアピールしていく外向きの企画は今回が初」（専修大学出版局・笹岡五郎局長）という。

想定する読者は、限界集落の問題や地域活性化事業に関心のある人としているが、同書は、専門家や研究者などではなく学生が執筆し「堅苦しい言葉ではなく、読みやすい感じで書いてある」（同4年・野谷あやめさん）ことが特徴。「地域活性化に興味を持つ大学生や高校生、地方に住んでる学生にも面白いと思う」と同4年・丸山貴史さんは話す。

刊行後は、新聞広告の出稿を予定し、各メディアの書評掲載なども働きかけていくという。

□A5判／約160ページ／本体1500円／ISBN978-4-8125-3083-3

メンバーが、事前調査を経て辻又地区を訪れた。

「最初は、『部外者が入ってきた』という雰囲気があった」（経営学部4年・寺嶋聖佳さん）というが、地域のイベントへの参加など交流を通じて、「一緒に集落を盛り上げていく仲間として見てもらえるようになった」（同）という。

受託した事業は単年度のものだったが、契約満了後も活動は

学生が出版にかかわった企画としては、近年では、同じ大学出版部協会に所属する大阪大学出版会の『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』のヒットが記憶に新しい。

大学出版部における学生の役割はどういったもので、そこに可能性はあるのか。大学出版部協会・黒田拓也理事長（東京大学出版会）に寄稿をいただいた。

卒業式の日にもかかわらず取材に応じてくれた森本ゼミの学生

出版市場・商品

寄稿

大学出版部協会・黒田理事長

大学出版部と学生

大学の教員と学生、そして大学出版部の三者が一体となって結びついた、大阪大学ショセキカプロジェクトの成果『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』は、新たな出版の可能性を感じさせてくれた稀有な好事例です。関わった学生による同書の「おわりに」には、「…本づくりに携わった非常に多くの人々の並々ならぬ思いが渦巻いている…」と書かれています。

東大出版会ではここ数年、東京大学の体験活動プログラムに協力するかたちで1カ月ほど学生を数名受け容れ、出版の仕事に触れてもらっていますが、学生の体験後のレポートには、本が作られ読者の手に届くまでに非常に多くの人が関わっていること、地道な仕事の積み重なりによって物事が動いていくこと、などが新鮮な驚きを持って語られ、実感してくれているのがわかります。大阪大学・東京大学の学生たちの言葉から、仕事や社会生活を行ううえでとても重要な要素を彼／彼女ら自身が大切なものとしてしっかりと汲みとれたということが、大学出版部という場を通してなされた意味は大きいと感じています。

専修大学出版局から刊行される『大学生、限界集落へ行く』は、大阪大学ショセキカプロジェクトとは少し趣きは違いますが、学生が南魚沼市辻又をフィールドに、多様な人びと、価値観等と関わるなかで、一つの大きな成果を生み出したところには大きな差異はありません。この本の主役のゼミは、「伝えたい情報を、いかに的確に相手に伝えるか」という「情報戦略」を専門にしているところです。そのことはまさに、出版において一番大切で常に持っていなければならないものでもあります。

専修大学出版局を舞台に、執筆者である学生たちはこのことをどこまで実践してくれているか、本書を読むのが楽しみですが、それを適切に導き後押しするのも、大学出版部の重要な役割なのでしょう。

紙面について